

蛇とピアス

「それから定有堂」

その三

奈良 敏行



定有堂教室は、二〇二四年三月から、定有堂ビルを離れ、外部へ出ることとなった。建物が老朽化していたし、駐車場がなかったので、利便性は良くなった。しかし四十年続いた根拠地から移動したそのアイデンティティーに変わりはないだろうか。やってみなければわからないことだからだ。

移動教室になっての第一回目は、三月七日（木）の「読書室ビオトープ」（小説の念）だった。いままでは十九時半開始だったが、この九回目から十九時開始になった。県民文化会館の貸し会議室なので、終了が二十一時半と制限があるからだ。気をもんだが、変更にもかかわらず、時間

通りに集合できた。

金原ひとみ『蛇にピアス』が今回の課題本で、参加者は十二人だった。

報告者は吉田達彦さん。高校生の時読んで深い印象を受けたとのことだった。定有堂書店では小説はあまり力を入れて扱っていなかった。点数が多すぎて店頭で扱いきれず、とくに新刊に需要が殺到するということもなかった。でも店頭での出会いでなく、一人一人成長の場面で、忘れられない思い出を刻む小説作品もあるのだと知ることになった。

『蛇にピアス』は金原ひとみが二十歳で芥川賞を獲得した作品だ。この小説世界の登場に衝撃を受けるのは同年代周りでないと難しいことだろう。ピアスや刺青による「身体改造」をテーマにしている。最も過激な「改造」として舌先を二股にする「スプリットタン」が出てくる。主人公の二十歳の女性は、その出会いを「自分の価値観が音を立てて崩れるのがわかった」という。十九年つちかった価値観が崩れる。四倍近く生きているわたしにはその崩壊感覚の大きさに共鳴するところはない。自分の十九年を否定し、「光の届かないアンダーグラウンドの住人でいたい」というその心の暗部にわたしの心は届かない。

この小説読書会に立ち会いはじめて数回たった頃、突然感動するものがあつた。「小説ってこんなふうに住むものなんだ」という発見と驚きだった。

今回の報告者の吉田さんもA4用紙六枚のレポートを用意している。「著者プロフィール」「登場人物案内」そして最後に「読解」のための資料。進行役の浜田浩之さんは、著者経歴、芥川賞の選評。毎日新聞「今週の本棚」に掲載された沼野充義の書評を資料として用意していた。関連本も十数冊、自分の書庫や県立図書館から探し出して紹介した。

この作品世界には「怒り」が満ち満ちているように感じた。この怒りのエネルギーを解き放てば長生きはできないと思う。主人公「ルイ」の恋人、十八歳の「アマ」は暴力沙汰で殺される。たくさんの「怒り」をぐぐり抜けて生き続けたわたしには、その怒りの熱量も消え失せ、関心も持てない世界の出来事と思え、「身体改造」へのあこがれも神話的世界のようで、通り過ぎ去った遠くの何事かと思えなかった。

吉田さんはまだこの「怒り」を生々しく反芻できる余韻の中にいるようだった。吉田さんはレヴィナス専攻で、定有堂教室「ドゥルーズを読む会」でも重要な報告を重ねている。この「身体改造」を「逃走欲求」ととらえた。

「屈辱」からの逃走だ。レヴィナスの『超越・外傷・神曲』（国文社）から引用して、「自我が自分自身であるという事実を断ち切りたいという欲求」だと分析する。なぜ断ち切りたいか。そこに「屈辱」があるからだ。わたしだったらここにオブセッションという言葉を用いる。「自己同一性は繫縛性」のもとにある。「自分自身に釘付けにされているという事態」、「自分自身から逃れることの根源的不可能性」、こういう概念的思考で本質に迫っている。レヴィナスの「屈辱」は生き延びたという取り返しつかない体験だ。

このアンダーグラウンドからの叫びはみんなに届いただろうか。ダークマターのような意識の深層、そして荒れ狂い表層を揺さぶる「屈辱」。特異な世界だが、外部に訴えるその力の異形性は、やはり「小説という形式の魔力」（沼野充義）なのだろうと思った。

定有堂ビルは一年経って人手にわたった。しかし名称は残してくれた。二階の小部屋には「定有堂教室事務局・音信不通編集部」の看板がかかる。奇しくもお隣さんは「ネール・アート」でほぼ全身タトウの人だった。「ボクは暗黒面の人ではありません」と言っていた。